

「読み」の流暢性を高めるための指導条件の検討

○菅佐原洋 · 平井裕子 · 山本淳一
 (慶應義塾大学) (福岡医療福祉専門学校) (筑波大学)

Keywords : 学習障害児, 刺激等価性, 流暢性, 読み

【目的】

学習障害児や注意欠陥多動障害児において、話し言葉には問題がないが、文章などを読む際にとぼし読みや読み間違いといった読みの困難を示す場合が多く見られる。読みスキルは、学業における基礎スキルであるだけでなく、学校場面に文章での指示も多いために学校適応の面においても重要である。ここで読みの困難の分析をしてみると、一音ずつの読みや拗音、濁音、促音の読み間違いといった要素が多い。これは入力された視覚情報を音韻表象や意味表象に変換することが困難であるためとされている(行廣・川上, 2000)。そのため、読みの流暢性が低くなっている可能性がある。この単語(単音)一音声一絵という読みや理解の関係は、行動分析学の観点からは、等価関係として分析できる。したがって、等価関係を成立させることで、読みの流暢性と正確性を向上させることができると考えられる。そこで本研究では、①それまでの学習経験から等価関係が成立している既知の単語の方が、等価関係が成立していない未知の単語よりも読みの流暢性が高いかという点、②文字と絵の関係を訓練することにより、文章の読みの流暢性が向上するかという点、を検討することを目的とした。

【方法】

参加児 : 実験に参加したのは1名の男児で、実験開始時の生活年齢は、6:11であった。CA5:11時に行つた①田中・ビネー式知能検査、②絵画語彙検査の結果は、①田中・ビネー式知能検査でMA4:00, IQ68であった。②絵画語彙検査の結果は、語彙年齢3:08、語彙知能指数(VIQ) 62であった。多動傾向がやや強く、そのため、微細な運動反応、視覚運動協応に困難が見られた。

場面設定 : 本研究は、すべて大学のプレイルームに

おいて行われた。指導は、基本的に週1セッション120分の内、20分ほど行われていた。セッション全体でトークンシステムを導入しており、強化子としてトークンシールが与えられ、集めたシールは課題間の休み時間3分間に、おもちゃを交換することができた。

刺激文 : 刺激には、「〇〇に〇〇を〇〇する」という文型を用いた。既知刺激は日常での出現頻度の高い単語を使用し、未知単語には日常での出現頻度の低いと思われる単語を使用した。1セットは3つの文章で構成された。

従属変数 : 刺激文の提示から参加児が文書を読み終えるまでの時間を1文あたりの読みにかかる時間として計測し、読みの流暢性の指標とした。

手続き

ベースライン : ベースラインでは、参加児にまず刺激文の印刷された紙を提示し、「声に出て読んでみてください」と教示した。子どもの読みに正誤に関わらず、「うん、そうだね」という形で課題従事のみを強化し、読みに関するフィードバックや指示は行わなかった。1セット3刺激を3回ずつ読む計9試行を1ブロックとした。なお、ベースラインでは、未知単語で構成された文章セットと既知単語で構成された文章セットの両方を評価した。

恣意的見本合わせ(文字→絵)訓練後評価 : 柔意的見本合わせ(文字→絵)訓練後評価では、まず未知の単語を見本刺激とし、それに対応する絵カードを選択する訓練を行つた。訓練では、「〇〇に」「〇〇を」「〇〇する」の3つのクラスごとに分類をし、各3刺激について順に訓練を行つた。まず、見本刺激を提示し、「これください」といながら、比較刺激3つを提示した。対応する比較刺激を選択できた場合には「そうだね。正解」と正答のフィードバックと社会

的賞賛を、誤った比較刺激を提示した場合には「残念」という誤答のフィードバックを行った。各3刺激3連続正答（合計9連続正答）できたときに、学習が成立したものとして訓練を終了した。

訓練終了後に、訓練に使用した刺激で構成された刺激文3文の評価を行った。評価の手続きはベースラインと同様とした。

プローブ1：プローブ1では、ベースラインと同じ手続きで未知の単語で構成された刺激文の読みを評価した。

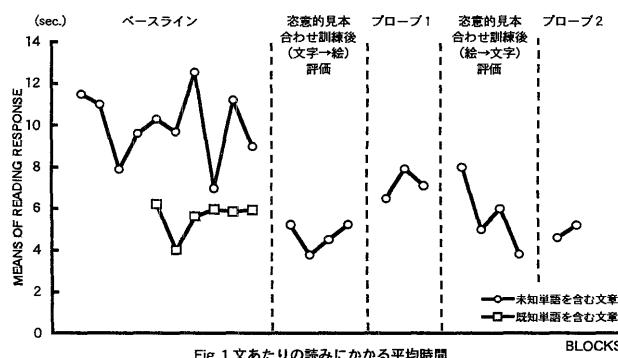
恣意的見本合わせ（絵→文字）訓練後評価：MTS訓練（絵→文字）訓練後評価では、まず絵カードを見本刺激とし、それに対応する単語カードを選択する訓練を行った。刺激は未知であると思われる単語とそれに対応する絵刺激を使用した。手続き、達成基準は、恣意的見本合わせ（文字→絵）訓練後評価と同様とした。訓練終了後、ベースラインと同じ手続きで訓練に使用した単語で構成された刺激文の読みを評価した。

プローブ2：プローブ2は、プローブ1と同様の手続きで行った。

【結果】

各ブロック9試行の読みの平均読み時間をFig.1に掲載した。ベースラインでは、既知単語で構成された文章が平均5.60秒で読めたのに対し、未知の単語で構成された文章は平均9.98秒かかっている。

次に恣意的見本合わせ（文字→絵）訓練後評価を見ると、平均4.69秒とベースラインでの既知単語の水準まで読みの時間が短縮された。そこで、プローブ1に移行したところ、ベースラインより多少速いが平均7.18秒と既知単語のベースラインや恣意的見本合わせ（文字→絵）訓練後評価に比較するとやや



遅かった。そこで、恣意的見本合わせ（絵→文字）訓練後評価を行ったところ、やや右下がりの結果ではあるが、平均5.70秒程度の結果であった。再度のプローブであるプローブ2では、平均4.90秒と既知単語と同水準の読みの速さであった。

訓練場面においては、特に使用する単語の読みを指示することはなかったが、参加児が自発的に音声表出をする場面が多く見られた。

【考察】

本研究の結果、未知単語で構成された文章より、既知の単語で構成された文章の方が読みの流暢性が高いこと、文字から絵、絵から文字の恣意的見本合わせ訓練により読みの流暢性が向上することが明らかとなった。これまででは、読みの指導においては、正確性の指導に重点が置かれてきた。一方、読みの流暢性も含めて行動の流暢性の指導は、効果の維持、耐久性、注意拡散の防止、訓練の転移などに有効であることが明らかになっている（Binder, 1996）。流暢性を促進するための条件を明らかにする研究が今後とも必要であると考えられる。

本研究は、等価関係に基づいた語彙の拡大が、流暢性の促進に効果的であることを示した。今後は、獲得した単語が他の文型の文章の中に入った場合でも効果が維持されるのかを検討をしていく必要がある。

(Hiroshi Sugasawara, Yuko Hirai, Jun-ichi Yamamoto)

【引用文献】

- 行廣隆次・川上正浩 2000 学習障害－発達的・精神医学的・教育的アプローチ 斎藤久子監修 ブレーン出版 Pp.118-133
- Binder, C 1996 Behavioral fluency: Evolution of a new paradigm. The Behavior Analyst, 19, 163-198.